

中国語教室からの報告と検討

泉 敬 史

外国語学部生が履修可能な中国語講座は2004年度より入門クラス(主に1年生が履修、A火曜3講・B水曜4講)、初級クラス(主に2年生が履修、水曜3講)、中級クラス(水曜2講)の3段階に分けて開講されている。入門クラスは泉と中国人教員が分担して週2コマで行い、初級・中級は泉が担当して週1コマで開講中である。いずれのクラスも英語学科生の受講が多く、これら講座の現状報告と検討が本学部のいわゆる第二外国語科目を考える上での一助になればと思ひ筆を執ることにする。

1. 修学状況

まず最初に2004年度春学期から2006年度春学期までの履修と単位取得状況について報告する。

① 入門クラス

- ・外国語学部准専用枠で、英語学科生がほぼ全員を占めている。
- ・ほぼ全員が1年生履修者で、英語学科生のほぼ半数からそれ以上が履修している。
- ・英語学科生の単位取得率は学期順に95.7%・89.4%、91.1%、84.0%、88.0%を示し、A評価(AAも含む)獲得率は同じく87.2%、89.3%、70.5%、69.6%、64.1%を示した。

	2004 年度		2005 年度		2006 年度	延数
	春	秋	春	秋	春	
履修者数						
英語学科	47	47	68	69	67	298
ロシア語学科	0	0	1	1	1	3
その他の学部	0	0	0	0	0	0
単位取得者数(A取得者数)						
英語学科	45 (41)	42 (35)	62 (48)	58 (48)	59 (43)	266 (215)
ロシア語学科	—	—	1(1)	0	1(1)	2(2)
その他の学科	—	—	—	—	—	

② 初級クラス

- ・中国語2年目履修を希望する学生に用意された学内唯一（文化学部を除く）のクラスで、全学部の多年次学生が履修できる。
- ・つまり、再開も含めて中国語履修を2年目以降も継続した学生が全学（文化学部を除く）でこれだけだったということで、他学部（文化学部を除く）の平均的な継続率は高くても20%に満たない（あるいはもっと低い）かと思われる。
- ・それに対して英語学科生の継続率は2005年度が57.1%、06年度が74.1%と顕著かつ伸長している。
- ・単位取得率は学期順に英語学科が100%、75%、95.8%、95.4%、97.7%、その他の学部は86.2%、57.1%、その後母数が大きく減るが100%、88.8%、57.1%を示した。A評価獲得率は英語学科が76.9%、66.6%、79.2%、81.8%、69.7%、その他の学部が37.9%、35.7%、77.7%、77.7%、42.9%を示した。
- ・なお、成績評価に関する決め事は後に記すが、これらは技量向上に必要な自主学習等を求めるガイドラインにしてどのクラスの履修者にも明示

中国語教室からの報告と検討（泉 敬史）

してある。

- ・その他の学部の 2005 年度以降の履修数減は訝るところである。

初級クラス	2004 年度		2005 年度		2006 年度	延数
履修者数						
英語学科	13	12	24	22	43	114
ロシア語学科	1	1	0	0	1	3
その他の学部	29	28	9	9	7	82
単位取得者数(A取得者数)						
英語学科	13	9	23	21	42	108
	(10)	(8)	(19)	(18)	(30)	(85)
ロシア語学科	1	1	—	—	0	2
	(1)	(1)				(2)
その他の学科	25	16	9	8	4	62
	(11)	(10)	(7)	(7)	(3)	(38)

③ 中級クラス

- ・ 2004 年度に開講した 3 年目の中国語教育を提供する本学唯一のクラスだが、履修者数は下表の通り少なく、初級からの継続率の目安は 2005 年度が 11.5%~23.0%、2006 年度が 15.4%に留まっている。
- ・ 履修者数は開講 2 年目から特に減少しており、訝るところである。あるいは授業難易度が高すぎたのかもしれない目下模索の最中である。一方、もはや語学の単位は要らないと履修登録をせぬまま受講を続ける学生も 1~2 名ではあるが毎学期来ており(下表員数外)、かかる向学心に応えずというわけにもいかない。
- ・ また、英語学科 3 年生の声によると、水曜 2 講は教職科目との重複で履修が困難であるそうで、時間枠の変更や増コマにも検討の余地はある。ちなみにこれらの学生には自主ゼミの形で中国語トレーニング授業を提

供してきたが(本年度は5名)、これは積極的な学生の声に促されてのことであり、いわゆる第二外国語教育の本学での現状が抱えるひとつの課題として認められよう。語学の技量向上や素養構築が、学習の継続を前提とすることはあらためて言うまでもない。

中級クラス	2004年度		2005年度		2006年度	延数
履修者数						
英語学科	9	9	0	2	4	24
ロシア語学科	1	1	0	0	0	2
その他の学部	8	5	3	4	2	22
単位取得者数(A取得者数)						
英語学科	8	6	—	2	2	18
	(7)	(3)		(2)	(1)	(13)
ロシア語学科	1	1	—	—	0	2
	(1)	(1)				(2)
その他の学科	6	3	3	4	1	17
	(3)	(3)	(1)	(3)	(1)	(11)

2. 教室運営と授業手法

入門クラス70人、初級クラスも50人(2006年春学期)の大所帯で、学習環境の整備と技量向上のために、教室運営と授業手法にはそれなりの工夫が求められる。ここでは2004年度から継続的に実施している取り組みについて報告する。

① 教室運営

(ア) 机ごとにふたりずつ着席させ、座席指定とする。

- ・トレーニングの時間(後述)にこのふたりで組んで会話・シャドウイン

中国語教室からの報告と検討（泉 敬史）

グ練習等を行う。欠席には適宜席を移動させて対応するが、3回連続の無断欠席者は座席指定を解除し、席の組み換えを行う。

- ・座席指定は履修者の顔と名前をいち早く一致させるために有用で、出欠の目視確認にも有効。

(イ) 出欠・成績備忘用の大学ノートを用意し、各人に1ページを割り当ててすべての情報をそこに記入していく。

- ・初回授業時にノートをまわし、座席番号と氏名を記入させる。その前に授業全般について詳しく説明し、履修意志を自己確認の上これをさせる。
- ・小テストや発声テストの合不合結果(後述)、出欠や欠席届の有無等、各履修者の記録を該当ページに記入しておき、学期末にはそれを見せながら成績評価や修学状況に関するコメントを必要に応じて出す。

(ウ) 毎時間のはじまり20分間で小テストを実施する。

- ・週に一度の授業だけで語学の習得は不可能。自宅での学習習慣を身に付けさせることが第一義。
- ・加えて遅刻対策、出欠管理、明確な成績評価基準として有効。

(エ) 入門～初級～中級の3年間で一冊のテキストを通して学習する。

- ・教材費の削減、来年・再来年には何を学ぶのか(何ができるようになるのか)の事前確認、教科書に愛着を持たせることによる学習意欲と継続意欲の向上を期待。
- ・いたずらに授業進行が早まることへの対策。

(オ) 毎学期に1回中国現代社会に関するビデオを見せ、その感想文を提出させる。

- ・感想文は日本語作文能力の確認にあて、文面内容については問わない。誤字脱字用法用語のミス文脈の乱れ等があれば1箇所につき10点減点して翌週返却する。100点とれて当たり前で、90点以下は社会に出られる作文能力に満たないことを指摘する。これを毎学期一回行い、自分のレベルを確認、認識させ、必要な対応を促す。

(カ) SNS・MIXI(参加者限定のネットワークサイト)を利用した時間外指

導と、アイトスによる出席状況揭示を実施する。

- ・ MIXI は泉が管理者となってサイトを運営し、本人確認の上希望者を参加させている。目下の参加者は 31 名で徐々に増え続けている。内容を公開しているため MIXI 会員であれば参加登録しなくても閲覧は可能。毎回の授業に関するコメントや感想、学生への意見要望等を載せている。これは 2006 年度から始めた試み。
- ・ アイトスには毎週出席状況を UP して全員に送信している。見ているのは 30% ほど。2006 年春学期からは授業評価アンケートもアイトスで行ったが、回答率も同程度。

(キ) 参加自由のコンパを年に一度実施する。

- ・ 学習継続の意欲はなにをきっかけとして膨らむのか、その可能性を広げる試み。これは初級・中級クラスで行っているが、これまでの例で参加率は 30~100% の間を示す。
- ・ クラス内の親交を促す。

(ク) 外部イベントへの参加を促す。

- ・ 漢語水平考試(HSK)、中国語検定、中国領事館主催の中国語スピーチコンクール、(財) 国際プラザ主催の中国文化・語学研修派遣(本年度より開催・夏休み期間中瀋陽に英語学科生 1 名が派遣された)等の告知と参加。

② 授業手法

(ア) 授業時間をテスト、トレーニング、講義の 3 つに区分する。

- ・ それぞれ 30 分をめぐりに設定し、授業にメリハリをつける。特に講義時間は 30 分だけだからと言って集中させ、私語等を極力排除する。秋学期からは私語者は即退出と取り決めている。
- ・ テスト時間中に入室すればたとえ白紙でも解答用紙を提出できるのでそれを根拠に出席扱いとなる。それ以降の入室は目視確認と本人の申し出を根拠に遅刻扱いとする。解答用紙の提出がなく、遅刻でもない場合は欠席とする。学生証による機械入力が出欠の根拠としない。

- ・たとえ 30 分遅れてもトレーニングの途中から参加できるからきちんと出ようという気になることを期待。
 - ・トレーニングは同じ机に座るパートナー同士で毎回行う。前週に課題を提示して、自宅で準備してくることを求める。毎回数組に公開でやり取りさせてタガをはめる。相棒同士で事前練習をするようになればよい傾向。本文の読みあわせや代入法、変換法、シャドーイング等テキストを使ったやり取り、単語帳（後述）を用いてのトレーニング等、さまざまなことを行う。
- (イ) 小テストは点数ではなく合格不合格をチェックし、4 回のチャンスを与えて合格するまで同じテストを繰り返し受けさせる。
- ・小テストには筆記（ヒアリングを含む）と発声のふたつがあるが、筆記は毎回行い、発声は適宜行う。
 - ・いずれも合格する（全問正解で合格）まで再テストを繰り返すことにより分かっていない箇所気づかせ、学習を促す。毎回新たな小テストが配られるから、間違えた箇所のみとはいえ再テスト受験者はその分多く問題をこなさねばならない。4 回目も NG であれば打ち止め（不合格）とする。
 - ・ひと学期で 10~12 回のテストを課し、合格すれば +1、不合格なら -1 をカウントして成績評価につなげる。他の評価根拠（無断欠席数、感想文提出の有無、総出席回数、単語帳作成等）もこれに算入する評価基準をはじめから明確に示し、AA 評価獲得へのガイドラインとして各自の奮起を促す。
- (ウ) 進行は急がない。知るのではなく使えることを確認して次に進む。
- ・語学にはゴールがない（私見）ので、知っている量ではなく、実際に使える量を少しでも積み上げることを目指す。自己学習の方法を身につけさせて、自分で実力を高めていけるだけの素養の構築を図る。
- (エ) 単語帳を活用する。
- ・学習した単語をいかにも使いそうな順に選んで記入させ、それを用いた

いかにも自分がしゃべりそうな日本語会話を作文してそれを中国語訳する。そんな個人ノートを作成させて「単語帳」と呼んでいる。

- ・毎日1文をメドに書き加えられた単語帳を授業に持参させ、トレーニングの時間にパートナーと交換して互いの作文を使った発声練習、ヒアリング練習、文章確認等をパートナー同士で話し合いながら行う。
- ・毎週の課題、長期休暇中の課題として継続的に作業させ、日常的な中国語学習習慣化へのきっかけとする。
- ・入門から中級まで3年間継続的に取り組ませ、自分だけの貴重な学習帳として機能するように取り組ませて学習意欲と継続意欲の向上につなげる。

(オ) 成績評価基準を明確に示す。

- ・学期後ではなく学期初めに示すことにより、毎週返却される小テストをひとつづつクリアしていく繰り返しが、成績評価にどう反映されるのかを認知させ、当初のやる気が継続されやすい流れを作る。
- ・入門クラスに1年生の履修が多い特質を活かし、大学入学当初より、単位取得数ではなくA評価にこだわるべき自覚を促す。

(カ) 日常的な自己学習の継続を促すための方策を織り込む。

上に述べてきた項目の多くがこの方策にあてはまる。しかし、日常的な自己学習を全学生に徹底させることが本当にできたら、これ以上の授業改革はなかろうし、もしも学部単位でそれができたら、想定できる最高の善循環が始まることであろう。つまり、方策といっても私がそう立ててみただけのことで、担当する中国語教室にそれが反映された現実が美しく現出しているわけではない。だが一方で、報告通りのパーセンテージで学生がこの授業についてきて、かつA評価を得ているという現実には可能性を感じる。英語（ロシア語）がきちんとできて中国語（その他の言語）もそれなりに話せる人材が安定的に輩出される体制が作り得るのであれば、それを目指してみたいものである。そこでおしまいに、全学的な視点も加えて、今後の取り組みについて述べておきたい。なお、参考資料として各クラスのシラバスと小テストフォーマット、秋学期の

ガイダンス用に配布した文書を末尾に添える。

3. 今後の取り組み

今後取り組みたい事柄は以下の通りである。

- ① **中国語の全学的な修学状況の把握**：中国語履修者の全学的な修学状況の把握ができていない。結果的に1年間しか学習しないような初習外国語教育はアリバイ的とでも言わざるを得ず、主専攻とは別に、在学中に、学費内で、少なくとも素養までは身につけたと胸を張れるような語学教育の提供が望まれる。はたして現状はどうか、中国語学習の2年目以降への継続率はどの程度高いのか低いのかを確認し、そうである諸因を把握したい。また、これは中国語に限らないが、共通科目としての語学教育の現状を大学としてどう考えるのかを検討し、積極的に対応していくことができれば、学生や社会から評価される本学の品質の向上にもつながるものと考えられる。
- ② **学習継続環境の整備**：いままで取り組んできたのは、(1)授業評価を高めて継続意欲の向上を図り、(2)科目やシラバスを整備し継続環境を保全する、の2点だった。報告した数字がこれら取り組みの結果なのであろうが、今後はこれに加え、学生たちが動機を持って中国語履修に進んでいくような流れを積極的に整備したい。

流れの始まりにおいては履修を待つという受け身の切り口ではなく、履修を促す新たな取り組みが必要かと思う。SNS・MIXIは200人規模の講義科目でも活用しており、中国語を履修する、あるいは履修を再開するきっかけとしての機能を果たし始めている。また、卒業後の進路決定に中国への留学や就職といった選択肢を紹介・斡旋・提供していくことにも、環境整備の効果的な施策として取り組んでいきたい。
- ③ **中国研修ツアー、語学研修の制度化**：かつて学生を引率しての中国研修ツアーを継続的に実施していた時期があり、複数回に分けて引率した7

名の内の3名がその後中国に留学し、その内2名がいまでは中国で職を得ている。残る1人はツアーガイドとして飛び回っており、母数は僅少だが、7人中3人が望む形で教育の社会還元をかなえたわけである。ちなみにツアーを経ずに留学した学生も他に6人おり、内3名はいまだ留学中で、1人はすでに上海で働いている。おそらく中国は今「肥沃な畑」なのであろう。これを耕し、種を植えるような仕組みを学部制度として立ち上げていきたい。

以上中国語教室からの報告と検討を述べてきた。語学教育の充実とその社会的評価は、学部はもとより大学全体に相当の魅力をもたらすものとする。中国語教育を担当する一教員として、それに向けてできることを継続的に手がけていくつもりである。

参考資料① 中国語入門A シラバス

■授業概要

はじめて中国語を学習する人のための講座です。「芸は身を助ける」といいますが、外国語の技能はその最たるもののひとつでしょう。特に中国語は「はじめの一步」を踏み出しやすい言語ですし、入門・初級・中級の講座が6セメスターにわたって用意されています。大学4年間を使って確実に身につけようという意欲を持って履修して下さい。

授業はテキストに沿って行いますが、中国や中国社会への理解や関心を深めてもらうための副教材(ビデオ等)も活用します。毎回課題(宿題)を出します。翌週にそれを確認するテストを受けていただきます。その他詳しいことを初回のガイダンスでお話しますので、必ず出席してください。

■授業計画

学期講座(Iは春学期、IIは秋学期)ですが、継続履修することを前提に1年の計画を記します。ただし、IIの履修はIの単位を取得した人に限ります。

初 回 ガイダンス

第2回 全般説明 単母音 四声 第1課①

第3回 テスト① 複合母音① 第1課②

第4回 テスト② 複合母音② 第1課③

第5回 テスト③ 鼻音 第2課①

第6回 テスト④ 子音① 第2課②

第7回 テスト⑤ 子音② 第2課③

第8回 テスト⑥ ビデオ 発音まとめ

第9回 ビデオの感想文提出 第3課①

第10回 テスト⑦ 第3課②

第11回 テスト⑧ 第3課③

第12回 テスト⑨ 第4課①

第13回 テスト⑩ 学期のまとめ(ここまでI・春学期)

(ここからII・秋学期)

第14回 ガイダンス 春学期の復習

第15回 テスト⑪ 第4課②

第16回 テスト⑫ 第4課③

第17回 テスト⑬ 第5課①

- 第18回 テスト⑭ 第5課②
- 第19回 テスト⑮ 第5課③
- 第20回 ビデオ いままでの復習
- 第21回 ビデオの感想文提出 第6課①
- 第21回 テスト⑯ 第6課②
- 第22回 テスト⑰ 第6課③
- 第23回 テスト⑱ 第7課①
- 第24回 テスト⑲ 第7課②
- 第25回 テスト⑳ 第7課③
- 第26回 予備日 アンケート

■成績評価

毎回のテストと出席状況、ビデオの感想文等を根拠に評価します。定期試験は行いません。理由のある欠席については、届けを出すことをお勧めします。ビデオの感想文は、日本語表現力の向上を図り、それを評価するものです。

■テキスト

「標準中国語 基礎編」

白帝社 上野恵司著 2000円 (CD付き)

■特記事項

毎回のテストは授業の最初に実施します。合格するまで繰り返し受けていただきますが、チャンスは4回までです。内容は日文中訳・聞き取り・作文等ですが、毎日20分程度の準備勉強をしてくれば1回で合格できます。朗読のテストも途中からですが毎回行います。

授業では読み合わせ・黒板への筆記・模擬会話といったトレーニングに時間を割きます。「間違えてあたりまえ」の気持ちで積極的に取り組んで下さい。

語学の習得は継続することが肝心です。したがって本講座も初級・中級へと学習を継続することを前提に進めます。たとえば上記テキストは入門で第1課から第7課まで学習し、初級で第8課から第14課をやって、中級で15課から巻末までを学習するという講義計画で取り組みます。3年間みっちり中国語を学習して、いっばしの中国語会話者となって下さい。

参考資料② 中国語初級 シラバス

■授業概要

中国語の学習が2年目の人を対象とする講座です。「知っている」だけではなく、「使える」中国語を身につけてもらいます。つまり、中国に関係する何かを行うための「道具」として、中国語をトレーニングします。毎回課題(宿題)を出しますので、きちんとやってきて下さい。それを確認するテストを毎回行います。こう書くと「たいへんだ」と思うかもしれませんが、1日20分程度の勉強を毎日してくればついて来られます。外国語を身につけようとする以上、この程度の努力は必要です。中国や中国社会への理解や関心を深めるための副教材(ビデオ)等も活用します。その他詳しいことを初回のガイダンスで説明しますから、必ず出席して下さい。

■授業計画

学期講座(Iは春学期、IIは秋学期)ですが、継続履修を前提に1年分の計画を記します。IIの履修はIの単位を取得済みの人に限ります。

初回 ガイダンス

第2回 入門講座の復習 第8課①

第3回 テスト① 第8課②

第4回 テスト② 第8課③

第5回 テスト③ 第9課①

第6回 テスト④ 第9課②

第7回 テスト⑤ 第9課③

第8回 テスト⑥ ビデオ いままでの復習

第9回 ビデオの感想文提出 第10課①

第10回 テスト⑦ 第10課②

第11回 テスト⑧ 第10課③

第12回 テスト⑨ 第11課①

第13回 予備日 アンケート (ここまでI・春学期)

(ここからII・秋学期)

第14回 ガイダンス 春学期の復習

第15回 テスト⑩ 第11課②

第16回 テスト⑪ 第11課③

第17回 テスト⑫ 第12課①

第18回 テスト⑬ 第12課②

- 第19回 テスト⑭ 第12課③
- 第20回 テスト⑮ 第13課①
- 第21回 テスト⑯ 第13課②
- 第22回 テスト⑰ 第13課③
- 第23回 ビデオ いままでの復習
- 第23回 ビデオの感想文提出 第14課①
- 第24回 テスト⑱ 第14課②
- 第25回 テスト⑲ 第14課③
- 第26回 予備日 アンケート

■成績評価

毎回のテストと出席状況、ビデオの感想文等を根拠に評価します。定期試験は行いません。理由のある欠席については、届けを出すことをお勧めします。ビデオの感想文は、日本語表現力の向上を図り、それを評価するものです。

■テキスト

「標準中国語 基礎編」

白帝社 上野恵司著 2000円 (CD付き)

■特記事項

毎回のテストは授業の最初に実施します。合格するまで繰り返し受けていただきますが、チャンスは4回までです。内容は日文中訳・聞き取り・作文等ですが、毎日20分程度の準備勉強をしてくれば1回で合格できます。朗読のテストも毎回行います。

授業では読み合わせ・黒板への筆記・模擬会話といったトレーニングに時間を割きます。「間違えてあたりまえ」の気持ちで積極的に取り組んで下さい。

参考資料③ 中国語中級 シラバス

■授業概要

中国語の学習が3年目の人を対象とする講座です。テキストを活用しながら、日常会話のトレーニングに力をいれます。ことばとは表現者がどう表現するかを決めるものです。ですから、どう表現すれば正しい中国語になるのかではなく、どう表現すれば自分の気持ちが伝わるのかを重視します。留学とか旅行とか、具体的な目標を持って学習して欲しいと思います。入門講座・初級講座と学習を続けてきた人にとっての最終段階です。自分の専攻とは別に、学生時代に得ることができた財産と思えるよう

中国語教室からの報告と検討 (泉 敬史)

な中国語力を身につけてください。初回のガイダンスで詳しいことを説明しますので必ず出席してください。

■授業計画

学期講座 (I は春学期、II は秋学期) ですが、継続履修することを前提に1年の計画を記します。ただし、II の履修はI の単位を取得した人に限ります。

初 回 ガイダンス

第2回 初級までの復習

第3回 テスト① 第15課①

第4回 テスト② 第15課②

第5回 テスト③ 第15課③

第6回 テスト④ 第16課①

第7回 テスト⑤ 第16課②

第8回 テスト⑥ 第16課③

第9回 テスト⑦ 第17課①

第10回 テスト⑧ 第17課②

第11回 テスト⑨ 第17課③

第12回 ビデオ いままでの復習

第13回 ビデオの感想文提出 第18課① (ここまでI・春学期)
(ここからII・秋学期)

第14回 ガイダンス 春学期の復習

第15回 テスト⑩ 第18課②

第16回 テスト⑪ 第18課③

第17回 テスト⑫ 第19課①

第18回 テスト⑬ 第19課②

第19回 テスト⑭ 第19課③

第20回 テスト⑮ ビデオ いままでの復習

第21回 ビデオの感想文提出 第20課①

第22回 テスト⑯ 第20課②

第23回 テスト⑰ 第20課③

第24回 テスト⑱ いままでの復習

第25回 テスト⑲ いままでの復習

第26回 予備日 アンケート

■成績評価

毎回のテストと出席状況、ビデオの感想文等を根拠に評価します。定期試験は行いません。理由のある欠席については、届けを出すことをお勧めします。ビデオの感想文は、日本語表現力の向上を図り、それを評価するものです。

■テキスト

「標準中国語 基礎編」

白帝社 上野恵司著 2000円 (CD付き)

■特記事項

毎回のテストは授業の最初に実施します。合格するまで繰り返し受けていただきますが、チャンスは4回までです。内容は日文中訳・聞き取り・作文、模擬会話等です。朗読のテストも毎回行います。

授業では読み合わせ・黒板への筆記・模擬会話といったトレーニングに時間を割きます。「間違えてあたりまえ」の気持ちで積極的に取り組んで下さい。

参考資料④ 小テスト入門クラス サンプル

2006年4月25日 (火) 初回配布

中国語入門 I A テスト①

初回	第2回	第3回	第4回

1. 日文中訳

- ① これは良い。
- ② あれは良くない。
- ③ 兄は背が高い。
- ④ 弟は背が低い。
- ⑤ 父は大きい。
- ⑥ 姉は小さくない。

2. 発声されたピンインと声調符号を記せ

- ①
- ②
- ③
- ④
- ⑤
- ⑥

参考資料⑤ 小テスト初級クラス サンプル

2006年4月19日(水) 初回配布

中国語初級 I テスト①

初回	第2回	第3回	第4回

3. 日文中訳

- ① 中国語で動詞述語文を書き日本語訳を添えよ

- ② 中国語で形容詞述語文を書き日本語訳を添えよ

- ③ 中国語で名詞述語文を書き日本語訳を添えよ

- ④ 君が書けるいちばん長い中国語文を書き日本語訳を添えよ

2. 作文(まずは日本文を書き、それを中文に訳して書く)

- ① 「什么」を使った文

- ② 「多少」を使った文

- ③ 「的」を使った文

- ④ 「几」を使った文

参考資料⑥ 小テスト中級クラス サンプル

2006年4月19日(水) 初回配布

中国語中級 I テスト①

初回	第2回	第3回	第4回

4. 日文中訳

① 中国語で結果補語文を書き日本語訳を添えよ

② 中国語で可能補語文を書き日本語訳を添えよ

③ 中国語で方向補語文を書き日本語訳を添えよ

④ 中国語で様態補語文を書き日本語訳を添えよ

2. 作文 (まずは日本文を書き、それを中文に訳して書く)

①前置詞「在」を使った文

②前置詞「从」を使った文

③前置詞「用」を使った文

参考資料⑦

2006年9月26日

中国語入門ⅡA ガイダンス

泉 敬史

1. 春学期の修業状況

履修者数：68名

単位取得者数：60名

内AA評価：29名 (42,6%)

A評価：15名 (22,0%)

B評価：11名 (16,1%)

C評価：5名 (7,4%)

2. 評価基準

加点：以下の項目1つにつき+1

- ・ 小テスト合格
- ・ その他のテスト合格

減点：以下の項目1つにつき-1

- ・ 小テスト不合格
- ・ 無断欠席

以上の加減点結果が 10～12：AA評価

9：A評価

6～8：B評価

4, 5：C評価

3以下：D評価

但し、8点獲得者で感想文提出の場合はその点数に係わらず+1しA評価とした。

3. 秋学期の注意事項

- ① A評価以上の獲得率が66%を超える講座である。また、評価基準も公開している以上、全員がこれを目指して受講すること。
- ② 2回連続で無断欠席をしないこと。何か連絡を寄越すこと。それもない場合、翌週以降の受講を認めない。
- ③ テスト時間・トレーニング時間・講義時間の3つに分けた授業を続けるが、この内講義時間中の私語は認めない。気づいた場合は理由が何であれ即刻退出してもらおう。だからくれぐれも私語は慎むこと。
- ④ アイトスを通じて毎週全員に出席状況等を配信している。各自これを活用すべし。
- ⑤ MIXI「札幌大学・中国の泉」に毎回授業に関するコメントを載せている。未加入者、未参入者には閲覧を勧める。希望者は izumi-t@sapporo-u.ac.jp までどうぞ。

参考資料⑧

2006年9月27日

中国語初級Ⅱガイダンス

泉 敬史

1. 春学期の修学状況

履修者数：51名

単位取得者数：46名

内AA評価：27名（52,9%）

A評価：6名（11,8%）

B評価：11名（21,6%）

C評価：2名（3,9%）

2. 評価基準

加点：以下の項目1つにつき+1

- ・ 小テスト合格
- ・ その他のテスト合格

減点：以下の項目1つにつき-1

- ・ 小テスト不合格
- ・ 無断欠席

以上の加減点結果が12~10：AA

9：A

8~6：B

5・4：C

3以下：D

但し、3,5,8点獲得者で感想文提出の場合は、その点数に係わらず+1し、D→C、C→B、B→Aとした。

3. 秋学期の注意・連絡事項

- ① A評価以上の獲得率が64%を超える講座である。また、評価基準も公開している以上、全員がこれを目指して受講すること。
- ② 2回連続で無断欠席をしないこと。何か連絡を寄越すこと。それもない場合、翌週以降の受講を認めない。
- ③ アイトスを通じて毎週全員に出席状況等を配信している。各自これを活用すべし。
- ④ MIXI「札幌大学・中国の泉」に毎回授業に関するコメントを載せている。未加入者・未参加者には閲覧を勧める。希望者は izumi-t@sapporo-u.ac.jp までどうぞ。
- ⑤ 11月22日（水）に忘年会を実施する。会費3000円で参加は自由。参加希望者はこの日を空けておくように。場所は西岡か福住。11月15日に参加の有無を確認する。
- ⑥ 来年おそらく3月に本講座修了者対象の中国研修ツアーを実施する。行先は上海か瀋陽。詳細は参加希望者と協議して決定。希望者は10月25日までに申し出ること。